

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19530465

研究課題名（和文） 近世日本の家システム研究

研究課題名（英文） The Family System (*Ie*) in Early Modern Japan

研究代表者

岡田 あおい（OKADA AOI）

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：50246005

研究成果の概要（和文）：本研究は、世帯構造と個人のライフイベントに関するデータベースを構築し、徳川後期農民のライフイベントが直系家族世帯形成にどのように反映するのかを検討し、当時の家システムを解明することが目的である。データベース構築に用いた史料は、東北日本2地域（会津山間部4か村・二本松平野部3か村）と中央日本1地域（美濃平野部6か村）の宗門改帳である。当初予定したデータベースの完成には至らず、一部データ入力やデータクリーニングを残す結果となったが、完成度の高い数村のデータを用いて、人口及び世帯構成の基本的指標について分析し、学会報告および単行本の一部として発表した。

研究成果の概要（英文）：This research has two objectives. First, it aims to create a database of household structures and individual life events from the Shûmon Aratame Chô (SAC). Second, it intends to identify the effects of peasant life events on stem family household by using this database. For this study, the historical materials used in creating the database consist of SAC from 2 regions in northeastern Japan (Aizu and Nihonmatsu) and 1 region in central Japan (Mino).

We were unable to complete the initially planned database, leaving some data entry and data cleaning uncompleted. However, we were able to use complete database from some villages to analyze fundamental population and household structure indices. We presented them at the conferences and published the papers by using the result.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000円	240,000円	1,040,000円
2008年度	900,000円	270,000円	1,170,000円
2009年度	500,000円	150,000円	650,000円
年度			
年度			
総計	2,200,000円	660,000円	2,860,000円

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：家族社会学・家族史・歴史人口学・宗門改帳・農民・家・世帯構造・ライフコース

1. 研究開始当初の背景

近年、直系家族が工業化以前のヨ - ロッパ農民社会でも発見され、直系家族は日本に特有な家族形態ではなく、農民社会に見られる一つの家族形態として位置付けられようとしている。ヨ - ロッパの直系家族と我が国の直系家族が同質のものなのか異質なものなのか、実証研究の成果を蓄積し検討する必要がある。

斎藤修は、「比較史上における日本の直系家族世帯」(速水融編著『近代移行期の家族と歴史』)のなかで日本の直系家族と北欧・中欧の直系家族を比較し、結婚した兄弟姉妹との同居によって、水平方向に拡大する契機を持っていない、という意味において両者は合同家族型(type of joint family)型とは区別される、という。北欧・中欧の直系家族は、その基底に核家族システムが存在するという、ミッテラウア - (Mitterauer)、ヘイナル(Hajnal)、ヴァドン(Verdon)の主張を支持する。しかし、日本の直系家族はその基底にあるシステムがこれとは異なると主張する。日本の場合は、北欧・中欧で観察される世帯主が両親と同居するタイプと、北欧・中欧には見られない世帯主が結婚した子どもと同居するタイプが観察されるからである。この点を根拠として、日本の直系家族には、合同家族型とも、核家族型とも区別される、異なる基底の家族システムが存在する、と説明している。まさに、このシステムが家システムであり、この日本に独自な特徴を実証研究から明らかにすることは学術的な意味があ

ると考える。

2. 研究の目的

本研究は、東北日本2地域(会津山間部4カ村・二本松平野部3カ村)と中央日本1地域(美濃平野部6カ村)の宗門改帳を史料とし、徳川後期農民のライフイベントが直系家族世帯形成にどのように反映しているのかを明らかにすることが目的である。3地域間の共通点と各地域の独自性を発見できれば、徳川時代農民社会に共通する直系家族世帯の特徴を明らかにすることができるだろう。また、その形成のメカニズムと各地域の人口学的条件を観察すれば、どのような人口学的条件が直系家族世帯形成に影響を及ぼし、歪みを生みだすのかを明らかにすることができ、当時の家システムの解明に迫れるものと考えられる。史料のデータベース化にはかなりの時間を費やすことになるが、データベースが完成した村から人口指標および世帯に関する基本的な指標を提示したい。

本研究の特徴は、第1に、これまでほとんど研究が行われていない、徳川後期の家族世帯の実証研究をおこなう点にある。近世後期以降の家族形態は、伝統家族の社会学的研究や近世史研究の成果により、直系家族を形成していたと自明視されている。しかし、徳川後期まで遡ると、農民家族の実証研究は、非常に乏しく、しかも、1カ村の史料を用いた研究に限られている。徳川後期の家族世帯研究が僅少な理由は、史料の問題と分析方法の問題にある。史料の

問題は、歴史人口学の史料として利用されている、宗門改帳を家族世帯の研究に利用することによって払拭される。第2は、分析の単位を村にするのではなく、地域に拡大する点にある。これまで、歴史人口学を含め、徳川後期の農民社会の研究は、村を単位とした研究が大多数である。1ヵ村の史料を用いると必ず出てくる問題は、代表性の問題である。本研究は、1ヵ村、少なくとも60年以上という長期にわたる史料を用い、しかも、1地域2ヵ村以上の史料が残存する、地域単位の研究をおこなう。つまり、世帯研究にとって最も重要な世帯構成のサイクルの分析を地域単位でおこなうことが可能になる。そのためのデータベース作成は必要不可欠であり、将来の世帯研究にも大きな貢献となるものとする。

第3は、本研究が、家族社会学と歴史人口学の学際的研究を可能にするという点である。これまで、世帯研究は、家族社会学と歴史人口学の学問分野で、独自に行われてきた。家族社会学の長所は、わが国の家族を分析する枠組みが整っている点にある。歴史人口学の長所は国際比較が可能な分析枠組みを備えている点にある。本研究では、家族社会学の世帯構成研究、家族周期論、ライフコース分析と、歴史人口学の世帯研究、それぞれを整理し、両者の融合を図りたい。

3. 研究の方法

本研究は以下の方法で行った。

既存研究の整理：家族社会学ならびに歴史人口学の既存の研究、さらに両地域の地方史研究を整理し、個人のライフイベントと家システム研究に必要な分析指標と継承・位座・同居親族に関する個人情報、さらに、個人の出生・結婚・死亡に関する人口指標の確認作業をおこなう。

史料の検討：各史料を文献資料とつき合わせながら、その特徴を明らかにし、利用可能な情報の整理をおこなう。原史料との確認など、必要に応じて、資料調査と現地調査をおこなう。

データベースの構築：これまでに申請者が作成したデータベース作成マニュアルを用いて、データベース構築・データクリーニングをおこなう。地域比較分析を考慮して、指標と変数を作成し、地域別分析のためのフラットファイルも作成する。

分析：データベース未完成時は、村単位の分析にとどまる。

世帯：(1) 世帯数・世帯規模等の基本指標を明らかにする。(2) ハメル・ラスレット分類を修正したモデルを用い、世帯構成の特徴を見出す。(3) 修正モデルを用い、世帯構成の2項間移行を観察する。

個人のライフイベント：(1) 基本的な人口指標の観察(2) 個人の続柄の検討

4. 研究成果

本研究は、世帯構造と個人のライフイベントに関するデータベースを構築し、徳川後期農民のライフイベントが直系家族世帯形成にどのように反映するのかを解明することが目的であった。本研究期間は、データベースの構築作業というステップにとどまった。データベースを構築する上で、検討すべき課題がいくつか見付き、課題をクリアするのに時間を費やした。データベース完成にはまだいくつかのステップを踏む必要があることが明らかになった。本研究期間は、データベースの構築中であるが、2008年度にほぼ完成した南杉田村のデータベースを用いて、人口および世帯構造の基本的な指標について分析、単行本の一部

として発表した。本論文は、パイロットスタディーとして位置づけられ、今後の研究の基盤にしたいと考えている。本研究は、データの確認作業、およびデータベースの構築に予想以上の時間がかかってしまい、当初の目的を果たすには至らなかったが、着々とデータベースは完成しつつある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Akira Hayami et Aoi Okada, Population, ménage et succession au nord-est du Japon : Aizu 1750-1850, Ebisu (MAISON FRANCO-JAPONAISE), 査読なし、Numéro 36, 2006, 91 - 138.

[学会発表](計4件)

Takahashi Miyuki And Aoi Okada, Women in a Stem Family : How did pre-modern Japanese women survive? SSHA Annual Meeting 2008, October 25, Miami.

Satomi Kurosu, Aoi okada And Miyuki Takahashi Widowhood and Remarriage in Northeastern Japan: Rural-Urban Comparison 1716-1870, European Social Science History Conference, February 26-Mar 1 2008, University of Lisbon.

Aoi Okada, Marriage and remarriage to maintain the stem family structure in early modern Japan, The 32nd Annual Meeting of the Social Science History Association, November 15-18 2007, Chicago.

岡田あおい、直系家族システム維持のための結婚と離婚 会津山間部の宗門改帳を中心として、日本人口学会第59回大会、2007年6月9日-10日、島根大学。

[図書](計2件)

岡田あおい他、歴史人口学と比較家族史 早稲田大学出版部、2009、63-107ページ。

岡田あおい他、家族・都市・村落生活の近現代、慶應義塾大学出版会、2009、135-161ページ。

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 あおい (Okada Aoi)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：50246005

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：